

会議の概要

1 会議名 (審議会等名)	宝塚市エイジフレンドリーシティ行動計画策定委員会 (平成 28 年度第 5 回)
2 開催日時	平成 28 年 3 月 29 日 10:00~12:00
3 開催場所	研修室
4 出席委員	藤田綾子、岡絵理子、橋田てつ子、溝口由加子、木本丈志、新谷俊廣、 多田嘉則、戸川進
5 公開不可・一部不可 の場合の理由	
6 傍聴者数	1 人
7 公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可
8 議題及び結果の概要	<p>(1) 議題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エイジフレンドリー連携協定について ・総論の検討について <p>(2) 審議結果の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1 月 27 日付でセブンイレブンと連携協定を締結したことを報告し、高齢者向けの就職フェアの実施状況と市内のセブンイレブン店長向けの認知症サポーター養成講座の開催予定について説明を行った。 ・エイジフレンドリーシティ行動計画について、総論について検討を行った。 <p>(3) 審議における主な意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エイジフレンドリー連携協定について <p>(委員長) エイジフレンドリーシティの中にも「社会参加と雇用」というトピックがあり、行動計画策定に先駆けて協定の締結が出来たことは非常に喜ばしいことである。</p> <p>(委員) 高齢者向けの就職フェアについて、参加者の年齢層はどのくらいだったのか。</p> <p>(委員) 私も NPO として就職フェアで説明をしたが、70 歳代の人に参加していた。見た目も若い人が多かった印象がある。</p> <p>(委員) シルバー人材センターも説明に参加したが、15 名が窓口に来た。そこから入会の説明には 13 名が来て、実際に会員になられた方もいる。年齢も 70 歳を越えている方もいた。参加者には、シルバー人材センターを知らない人や元会員の人もいた。</p> <p>高齢者の中にはコンピュータ関係の仕事がしたい人もいるが、求人がなく、マッチングが難しい。</p> <p>(委員) 就職フェアには、どのような事業者が来ていたのか。</p> <p>(委員) 若水や建築業関係、福祉関係の企業が参加されていた。</p> <p>(委員) 福祉の現場では、運転手は短時間業務なので、運転技術が熟練されている高齢者を雇用している事業者も多くいる。</p>

(委員) パソコンの関係でいうと、データ入力などは若い方に負けてしまうが、高齢者にも出来ることがあると思う。

(委員) 最近では、データ入力の仕事はネット上に求人が出ていることがある。高齢者がネット上の求人に辿り着いていない。仲介役として、ネット上の求人と高齢者を繋ぐ必要がある。

(委員) 姫路にエスアイという企業がある。今年内閣総理大臣賞を受賞した。障害者雇用と女性の雇用に1時間単位の時給制で行っている。賞与はないが、能力に応じて時間単価が上がっていく。朝8時から18時まで間に好きな時間に出勤をし、希望をすれば社会保険にも加入できる。月168時間以内という制限はあるが、子育てが終わって働きたいという人が行きやすい環境がある。

大手企業のSEをやっていた人が子育てをしながら働いているなど能力の高い人が集まっている。年齢は最高が74歳、平均年齢が44歳である。個々の能力が高いという話も聞いているが、障害も持っている人も働いており、長時間就労が続かないということもあり短い時間で働いている。

実際に働いている現場も見したが、データ入力だけのエリアやプログラミングだけをするエリアなど分野ごとに分かれており、それぞれに専門的な知識を持っている人がチェックを行っている。ミスも少なく依頼をしている企業からの評価も高い。依頼先の企業から値上げの話もあるが、値上げ交渉も行っていない。値上げ交渉で競争を生むことよりも信頼してもらうことにより仕事を得ることを目的としている。

経営者は大阪出身で関西学院大学の非常勤講師をしている。兵庫労働局の協力もあって現在のような1時間単位での仕事を実現できている。全員正社員であり、60人の会社である。年齢もバラバラで面接だけで採用を行っている。

(委員) 仕事と人をうまく繋いでいる例だと思う。高齢者で集めてしまうと周りも先入観で高齢者がする仕事という印象をもってしまう。能力で集めることによって、実際に労働者の顔を見た時に高齢者だったと分かることのほうが良いと思う。

(委員長) 宝塚市でエイジフレンドリーシティの取組をするにあたって、市民参加と雇用というのを目玉にしたいと思う。当然課題はあると思うが、セブンイレブンの協定や就労フェアのように他の部局で行っている事業も巻き込めたら良いと思う。元気な高齢者の力が有り余っている印象を受けるので、市の力に取り込むことによって、市全体が活性化し、高齢者本人も生きがいを感じることができれば良いと考えている。

宝塚市内でも高齢者がファミリーレストランで働いているところを見かけることがある。事業者は、結果として高齢者を雇用しているのだが、そこにエイジフレンドリーシティのマークを張ってもらい活動を普及できればいいと思う。

(委員) 宝塚は市民の意識は高いが企業が少ない。市民が自ら仕事を作
っていき、そこで自ら働くような動きができれば良いと思う。

(委員) 現在、市内でもソーシャルビジネスで何か出来ないかという動
きがある。高齢者という枠組みではなく、若年層についても仕事
と人とのマッチングが出来れば良いと感じる。仕事を作るのが若
年層で実際に働くのは高齢者という形式もあって良いと思う。

(委員) 福祉の現場でも人材不足の問題もあり、仕事の一部を切り出し
て求人を出すことも検討されている。また、若年層や壮年層にも
仕事をしづらい人もいるため、高年層で経験を積んだ人にアシス
トしてもらい仕事をしていくという構想もある。今後は、高齢者
だけでなく全ての世代の力が必要となってくる。

(事務局) エイジフレンドリーシティ行動計画は5年計画であり、取組を
年次的に積み上げることも重要である。市やNPOや社会福祉協
議会などそれぞれの組織が単体で実施しても、うまくいかないこ
ともある。しかし、それぞれの組織が協力・連携することや市民
の力を借りることにより、うまくいくこともある。そういった取
組の積み重ねること、5年後に計画として意味がでてくるので
はないか。

(委員会) エイジフリーの求人があれば面白いと思う。年齢制限に下限は
必要だと思うが、上限を設けないような企業が出てくるように何
かインセンティブを考えたら良いと思う。また、そういった企業
が増えれば良い。

昔、京都駅にコーヒー店があった。従業員が全員白髪のおじさ
まで、それをウリにしていた。礼儀正しく高級感があったのを覚
えている。高齢者というのをプラスの存在にとれば良いと思う。

(委員長) 雇用や社会参加は、いいアイデアがたくさん出てくる分野だ
と思う。そこを一つの目玉に出来れば、生きがいや介護予防にも
繋がるのではないか。

(事務局) 各論では各トピックにおいて目玉を検討し、関係者が議論をす
ることで取り組んでいければ良いと思う。

・総論の検討について

(委員) P14の「計画の位置づけ」のイメージ図について、エイジフレ
ンドリーシティの計画から、観光・文化・産業から都市経営に向
けて矢印が伸びている。この矢印だと観光・文化・産業が一番初
めで、そこから順番に進めていくような表現に見えてしまう。横
串を刺すことを表したいのは分かるが、矢印を工夫した方が良い
のではないか。

(委員長) 矢印の形を変えるか双方向の矢印にするか、もしくはエイジフ
レンドリーシティ行動計画を各計画の上に記載するなど検討をし
てほしい。

(事務局) 誤解を生まない表現を検討したい。

(委員長) P8に「地区ブロック別でみる高齢化の進展」について、各ブロックを記載してもらったが、各ブロックが市内のどのあたりの地域を表しているのか市民に知られているのだろうか。例えば、7ブロックでいうと西谷地区と記載していたほうが分かりやすいのではないか。他のブロックについても同様のことが言える。高齢化率でも地域性が出ており興味深いデータではあるが、地域名を入れた方がより分かりやすい。

(委員) 市役所の人、第1～第7ブロックと聞いて地域が分かるかもしれないが、市民は分からない。また、北部地域が右下に記載されているので、地図が繋がっているように見えるため西谷地区と分からないのではないか。南部の地図と分けるために、線を入れて区切ることも考える必要がある。

(委員) 例えば西宮や川西、伊丹などの隣接する市などの周辺の情報を記載するのはどうか。また、武庫川がブロックの境目となっているので、より武庫川を分かりやすく記載すれば、自然的な位置情報で各ブロックを理解できるのではないか。

(委員) カラーで記載すれば分かりやすい。ホームページで公開することも考慮してカラーで記載してほしい。

(事務局) カラーにすることも含めて検討したい。

(委員長) 再度ブロック別の記載を検討してほしい。

(委員長) 第1章～第3章について、今後細かな修正は加えていくが、大まかな流れは確定したということにしたい。

(委員) P17の「計画の基本理念」について、指針1に「超高齢社会に対応するため、施策を見直します」とあるが、見直すだけでなく施策の展開や重点化して取り組むなど表現を変えたほうが良いのではないか。

(委員) 指針1と指針2は、当たり前のことを記載していると思う。指針として記載することに疑問を持つ。指針1と指針2がハードとソフトとして記載しているというのも違和感がある。何事もハードとソフトに分けることが間違っている。例えば、建物は良く出来ているのに運営がうまく出来ていないなど、宝塚市でもそういった課題はあったと思う。そうならないためにも、ハードとソフトを一体化して取り組むことが、現在の状況にあっているのではないか。

ハードで出来ていない部分についてソフトで補完するという考え方もある。例えば、公共施設を作る時でも位置や設備などのハード面も重要であるが、いかに人を呼び込むかといったソフト面も考えなければならない。

指針に記載されている内容自体は間違いではないのだと思うが、ハードとソフトに分けて考えているは改めなければならない

のではないか。

(委員) 施策展開の体系について、指針 2 は指針の内容と施策展開が関連していると読めるのだが、指針 1 は指針の内容と施策の展開が関連しているようには読めない。

(委員) 行動計画は市民に対して示すものだと思うので、第 4 章については、特にイラストを挿入するなど見ていて楽しめるものになるよう工夫をしてほしい。

また、指針 2 の施策展開の体系は第 5 章の (2) に記載されている協働によるエイジフレンドリーシティを推進しましょうということなのだと思う。互いに支え合うということは、さまざまな年齢の人が助け合うことなのだと思うが、施策展開の体系に記載されていることが違うので疑問がある。

「安心・安全なまちづくり」で、「安全で安心して住み続けられる環境の整備」に違和感がある。道路に段差がないというだけではなく、一人暮らしの高齢者の見守りも含めて「安心で安全なまちづくり」なのだと思う。整備と記載してしまうとハード面のまちづくりと感じてしまう。

(委員長) 例えば、指針 1 に「安全で安心なまちづくりを目指します」とし、指針 2 を「みんなが参加し、互いに支え合うまちづくりを目指します」というのはどうか。

(委員) 指針 1 と指針 2 の施策展開の体系は、1 つにまとめてしまってもいいのではないか。例えば、指針 1 の「人と人がつながり合えるまちづくり」は、指針 2 についても言えることだと思う。施策展開の体系自体が基本理念のところには必要ないのではないか。第 4 章には、理念や指針だけで良いと感じる。

(委員) 指針 1 に記載されているように見直さなければならない施策はたくさんあるのか。これはハード面だけの話なのか。

(事務局) ハード・ソフト関係なく超高齢社会に対応するために見直す必要があるということである。

(委員長) 確かに施策を見直すことは当たり前ことなので、指針で記載する必要はないのかもしれない。記載すれば意識するかもしれないが、それを市民に対して示す必要はなく、庁内で意識付けを行えば良いと思う。市民に対する宣言として「安心・安全なまちづくり」を前面に出し、ハード・ソフトの両面からまちづくりを検討すれば良い。

もう 1 つ気になるのが、指針 2 に企業と記載されているが違和感がある。事業者に変更した方が良いのではないか。

(委員) 確かに企業は、各種団体という表現でも良いと思う。

(委員) 指針 1 は、「施策を見直して〇〇な社会を目指します」のような書き方が良いのではないか。

(委員) 基本理念との計画推進の指針の関係が切れていると思う。

(事務局) コンパクトシティなどでも最終的にはまちづくりに行き着いている。前回提示した資料では、理念・指針・仕掛けが並んでおり、総花的な印象を受けたため修正を行った。今回提示した指針には、超高齢社会に対応したまちづくりを推進することを示したいという考えがあった。第6章の8つのトピックにつながるような理念や指針にしたいと思っている。

(委員) ハードとソフトは、空間と人の話であると思う。私は、新しい住環境価値の創造小委員会の委員を務めている。そこで10年間話し合っている内容が、空間的持続性と社会的持続性である。

空間的持続性というのは、例えば、まちの商店街がダメであると衰退してシャッター街になってしまう。しかし、賑わっていると変化がある。古くなったものは修理がされ、より活性化すれば既存のものも新しいものに更新される。持続的に更新することを指標としている。社会的持続性も人の入れ替わるといった流動性をもって地域の持続性を考えるものである。この2つから新しい場の価値を創造しようという考え方である。こういった考え方も取り入れれば良いのではないか。

(事務局) 確かにそうかもしれない。例えば「交通機関」でも必ずしもバス停の整備だけではない。そこへのアクセスを人との繋がりでカバー出来れば良い。そういった意味では、先ほどの意見と重なる部分はあると思う。

(委員長) 基本理念との繋がりを考えると、指針1が「超高齢社会に対応するために施策を見直すことで、高齢者が行動するまちづくりを目指します」とし、指針2が「みんなが参加し、互いに支え合うことによって希望あふれるまちづくりを目指します」とするのはどうか。安心・安全なまちづくりという言葉は説明文の中に溶け込ませて、施策展開の体系は削除した方が良いと思う。体系表を挿入することで、それに縛られている印象を受ける。具体的な施策展開については、第6章以降に記載すれば良いと思う。

委員会の意見を参考に再度検討をお願いしたい。

(事務局) 今回の委員会の意見を基に再度検討したい。

(委員長) 各論を記載する上で、改めて基本理念を見直す可能性があると思う。そのことも委員と事務局には念頭に置いてもらいたい。

(委員) P19 にエイジフレンドリーシティ庁内推進検討会を発足する上で、庁内ヒアリングを行ったのか。各部局に対して、現在どんな事業をやっており今後どのような事業を考えているかを聞くことで次の展開が考えやすくなる。外部のコンサルに任せることも手段の1つかもしれない。外部の公平な目で見ると違ったものが見えてくるかもしれない。ヒアリングを行ったうえで庁内検討会を行わなければ、会議が形骸化してしまって話が出来ないのではな

いか。また、管理職ではなく若い職員でワーキンググループを作るなどすることも検討すれば良いのではないかと。

(事務局) 庁内の意識を変えたいうえで共通認識を持つことが必要である。しかし、全部局が集まっても意識の統一は難しい。そこで、各部局内でエイジフレンドリーシティに関する協議を行うことも考えている。

(委員) 関連する部署だけではなく、より横断的な組織にするのも良いと思う。その方が俯瞰的に物事を見られるのではないかと。

(委員長) 勉強会のような形では行っていないのか。

(事務局) 庁内推進検討会が勉強会のような役目も兼ねているのだが、突っ込んだ話が出来ていない。他の部署の土俵には入らないといった雰囲気がある。

8 トピックスごとに目玉を決めて議論をするのも手段の1つだと考えている。形式的な検討会では議論の広がりが出来ないこともあるので、今後各論を記載する上で工夫が必要であるとは思っている。

(委員長) 私も庁内検討会に参加した際に各部局の自己評価を行ったが、行政として出来ているという評価が多かった。もしかすると、課題が見つけられるような庁内検討会にはなっていないのかもしれない。

(委員) P20 の推進体制の図において、高齢者を宝塚市や様々な団体が取り囲んでいる。企業・事業者、当事者団体も含まれているが、その団体などとは連携はとれているのか。

例えば、商店連合会や商工会なども寂れていっている印象を受ける。今後は元気な高齢者が起業するなどして発展できれば、商店も活性化し高齢者も生きがいを感じることができる。市と商工会や商店連合会が連携して起業する仕組みを作れば、地域が活性化するきっかけになると思う。

(事務局) 委員会前半でブロックの話があったが、地域の課題を考える際は、より小さな単位で考えなければならない。商店街でも空き店舗が増えているが、それも地域住民でアイデアを出し合い何か出来ないか考えれば良いと思う。行政が無理に誘導するのではなく、自然発生的にそういった動きになれば良い。

(委員) P20 の推進体制の図で実際に推進するのはどこかが分からない。また、高齢者を各種団体で囲んでいるのもエイジレスでないと思う。例えば、プラットホームのようなものがあって、それが各種団体の協力を得て推進をしていくというイメージを伝える必要がある。ラウンドテーブルを宝塚市や委員会が後方支援するような表現も考えていいと思う。

(委員長) イメージ図の上から言うと、行動計画推進委員会があり、次に庁内検討会がある。その隣に対等な関係として、推進する各種団

体がある。そこから基本理念につながる。最終的には市民の生活の質の向上になると考えている。先ほどの委員の意見にもあったが、実際に推進するのは、ラウンドテーブルを囲む市と各種団体であるところを示す必要があると思う。図の形も円で統一することや宝塚市の推進検討会も各部局の具体的な名称を記載することも考えられる。

最終的な目的である市民の生活の質の向上に繋げられるように検討してもらいたい。

(事務局) 庁内推進検討会が各種施策の進行管理を行い、その中で既存施策を高齢者を意識した施策に転換することを考えている。また、エイジフレンドリーが目玉事業を各部局で検討することで庁内の意識が高齢者に向くと思う。そのコーディネートをするのが事務局である地域福祉課であると思う。

(委員長) 高齢者目線ということを前面に出しすぎると、児童などの部局や関係団体は自分たちとは関係ないと感じてしまうのではないか。エイジフレンドリーシティは協働の取組であり、市民や関係団体に対しては市民全体の目線で検討することを出しつつ、高齢者目線で検討することは庁内での推進体制にとどめる必要がある。また、エイジフレンドリーは市役所だけでは出来ない事業であり、市全体で基本理念に向けて推進していくイメージを伝えることが出来れば良いと思う。

(委員) P20 のイメージの「高齢者」部分を基本理念にすれば良いのではないか。市全体で基本理念を取り囲んでいるイメージが伝わると思う。また、宝塚市のところにはエイジフレンドリーシティ行動計画を記載して、計画を市の関係部局が取り囲むイメージにしてはどうか。関係部局は、より関係の深い福祉系の部局を大きな文字で記載してもいいかもしれない。宝塚市が基本理念と基盤となる政策を支えているイメージが伝えることが出来れば良い。高齢者を取り囲むことよりも、基本理念を取り囲んでしまう方が望ましいと思う。「地域における連携・協働の取組」も外に出すのではなく、中に入れてしまってもいいかもしれない。

(委員長) 市の協働の指針の中にエイジフレンドリーシティの考えも含まれるということをイメージ図に反映出来れば良いと思う。

(事務局) 委員会の意見を参考に改めて検討したい。

(委員長) 第6章の施策の展開について、WHOが提示している評価の指針は「物理的環境」と「社会的環境」に大きく分かれている。

また、資料にあるように「物理的環境」は「屋外スペースと建物」「交通機関」「住居」、「社会的環境」は「社会参加」「尊敬と社会的包摂」「市民参加と雇用」「コミュニケーションと情報」「地域社会の支援と保険サービス」に分けている。宝塚市もそれに基づき施策の展開を記載していき、評価をしていくことを事務局とし

て考えている。先ほどの委員の意見にもあったように、当然、「交通機関」や「住居」についてもハード面の問題だけでなく、ソフト面の問題も考えられる。両面から検討することで、高齢者の生活の質の向上が得られると思う。運用の段階では更に検討が必要になる。

行動計画の各論には、宝塚市の現状を記載し、それがベースとなり今後の評価につながる。また、評価をする際には、主観的评价と客観的评价によって行う。「客観的评价」は各部局が総合計画に基づき実施している2016年時点での事務事業評価を活用し、それが5年後どう変わっているかを評価する。既存のデータを活用することで評価することができると思う。

しかし、「主観的评价」は、それぞれの項目について市民の意識の調査をしなければならない。現在、事務局で市民アンケート調査の結果は保有しているものの、調査対象や地区に偏りがあり、市全体の意識調査として採用することには違和感がある。市民に誤解を生むことが予想されるため採用が出来ないと思う。今後、事務局として、改めて宝塚市の現状調査を実施する予定がないので、5年後に市民意識調査を実施するという事しか計画の中には記載出来ないと考えている。

(委員) 8つのトピックを埋めるためにも、庁内ヒアリングを実施すれば良いと思う。ヒアリングの結果で不足している部分について、委員会で検討をすることが求められる。例えば、「屋外スペースと建物」では公園のエリアマネジメントの話などを委員会で検討できれば、自ずと施策としての客観的评价の指標が出てくる。

また、主観的评价のアンケート調査での満足度調査は曖昧なものが多いと思う。むしろ行動アンケートを実施すれば良いと思う。例えば「公園に週何回行くのか」や「公共施設をどのくらい使っているか」「広報誌をどれくらい読むのか」などの行動調査をすると具体的な数値がでるので、市民がどんな動きをしているのかが分かって面白い。調査対象も市民の状況に応じて、寝たきりの方などにはトピックス別に行えば良いと思う。

(委員長) アンケートはベースの評価がないので、「エイジフレンドリーの取組を始める前と比べてどうか」という内容でもいいのかもしい。質問の切り口を工夫すれば良い。

市が事業として実施していても誰も活用していなければ意味がない。そういったことが分かるアンケートが必要なのだと思う。

アンケート調査などの評価項目の選定は、議会などでも取り上げられる可能性もあるので、慎重に行わなければならない。

WHOの示している評価項目は、印象評価のような感じであり大まかな項目でしかない。宝塚市として、評価項目を細かなものにするのか、大まかなものにするのかを決める必要がある。

事務局として、行動計画策定後に、施策をいかに改善するかま

で細かく決めるのか教えてほしい。私は、エイジフレンドリー行動計画は考え方をアピールする取組の指針だと考えている。道路の段差や交通機関の改善は別のものだとも思っている。

(委員) 私はハード面の取組について、既に高齢社会の対応として、市で実施している事業も多くあり、細かく項目を決めていくものだと思っていた。事務局としてはどう考えているのか。

(事務局) 行動計画は、主としては、市や市民の取組の指針を示すものでありたいと考えている。一方で、現在も市として行っている事業は多くあるので、別掲という形で8トピックごとに事業を細かく記載できれば良いとも考えている。また、事務事業評価は、エイジフレンドリーに関係なく実施しており、客観的指標としてそれを体系付ければ良い。WHOは、主観的評価と客観的評価の2つの評価方法を提案しているので、取組の指針の部分は主観的評価を行い、細かな事業の項目については客観的評価を行うことが想定されている。行動計画の構成面も含めて、今後決めていく必要があると思う。

(委員) 広報活動が必要になると思う。市民がエイジフレンドリーの取組を知っているのかが重要になる。例えば、横浜市だったと思うがオープンデータの話がある。市民が公共施設などで傷んでいる箇所があれば、市民自ら写真をとり、市に送ると対応する。市としては見回る必要がないので、手間が省ける。宝塚市では、高齢者が生活の中で危ないと感じることを市へ通報できるような仕組みをイベント的に検討すれば良い。意外と苦情ではないということも多いらしい。結果として、こういった取組が市民への周知につながる。

(委員) 宝塚市では郵便局と協定をして、配達員が道路の傷んでいる箇所などを通報する仕組みを作っていた。しかし、街灯については、近隣住民との問題もあり自治会単位での通報を依頼していたと思う。

(委員長) 課題はあると思うが、イベント的に様々な取組を検討いただきたい。

・スケジュールについて

(委員長) 啓発活動などの予算も計上されており、スケジュールに沿って計画策定するとともに啓発活動を行ってほしい。